

## 第2回感想文コンクール【優秀賞】 8作品

### 「挑む」という言葉にひかれて読んだ本

小学生

私は、最初に目に入った所が「挑む」と言うところでした。それから題を見ると、厳冬期の富士山気象観測に挑むという題でした。

今まではふつうに予測されているのに、厳冬期の富士山などなぜこのようなことが題にされているのか不思議でした。だから目を通してみると、ある夫婦のお話でした。

その夫婦は2人とも福岡市の出身の夫婦で、夫婦で活躍したお話でした。その夫婦の名前は野中到さんと千代子さんでした。私はこのお話、野中さん夫妻はすばらしいと思うところはいくつかあって、一番心に残った所は到さんと千代子さんは、誰もが実現していない課題を果たそうとしていたのです。その課題は、題そのものの厳冬期に富士山に登り気象観測をするということでした。このことは、明治時代の初期にとっては大変難しいことで、私は、なぜここまで野中夫妻はするのであろうかと思いました。それを求めるために読み続けました。

私は、最初2人でやっているのかと思いました。けれど到さんは千代子さんを置いて富士山に登りました。それで私が思ったことは、千代子さんはどんな気持ちで残ったのだろうと、話の続きを読んでいると、千代子さんはやはり到さんが富士山に登る前から考えていることだったのです。もし私が千代子さんだったら同じことを思うでしょう。それにお話の中では、「気象台の和田雄治さんは、困ったものだと思っていたようです。」と書かれていたけれど、それも承知で千代子さんは到さんの先輩の和田さんだけには気持ちを伝えておきたいと考えて、千代子さんは手紙を残したのです。それに手紙の内容は、到さんのことを思っている内容だったのです。だから先輩の和田さんの考えも、千代子さんの思いの深さで変わったと思います。けれど、到さんと千代子さんは辛い生活だったと書いてあります。富士山の頂上での山小屋の生活で、体力的に高山病になったりして重態だったようです。それに、2時間おきに風速や気温などを調べて記録する作業を昼夜交代しながら続けるので大切な観測機器も凍ってしまって使いものにならないのに私は、どうしてだろうかと考えてしまうと思います。

重態におちいりながらも懸命になって観測を続けていた2人をすごいなと思いました。それから重態の2人を発見したのは、ちょうどこの頃に山頂に訪れた有志の慰問隊でした。ただちに救援隊が組織され富士山に向かいました。救援隊が山頂に到着した時、2人は危険な状態でした。けれどここまでがんばれたのはなぜだろうと思いました。もし私が富士山に登っていたら寒いのが嫌ですぐにあきらめていたと思います。そして、国のために自分の命を使ってでもやろうとは思わないと思います。けれど、私のことばかり考えずに、他人のことも考えようと思いました。

## 「野中夫妻の勇気、感動、努力」

### 小學校生

僕がこの話「厳冬期の富士山気象に挑む」を選んだ理由は、誰もがおじけづくほどの冬季富士山に3千メートル級の高山の観測は不可能だと言われた山に、たった2人で登り観測するという、勇気に感動したからです。

この話を読んで、野中到、千代子さんの生き方がすばらしいなと思いました。何がすばらしいかというと、この頃の明治28年の頃は、天気分野が世界から遅れをとっており、高い山の上に气象台も設けられなかったので、3千メートル級の高山の観測は不可能といわれていたのに、この2人（野中到、千代子さん）はその不可能に挑戦した勇気がすばらしいなと思いました。とくに到さんは、登山に失敗したにもかかわらず、工夫に工夫を重ねてあきらめずに登ってことはすごいなと思いました。この登山をするだけでもとても困難なのに、その上に山頂での観測までしなければならなくなると、僕だったらすぐにあきらめるでしょう。でも、そんな困難なことを毎日して、日本、世界のために役立てようとすることはとてもすばらしいと思います。

千代子さんは、だれもおじけづく冬季富士山に登るために背振に登り、少しでも到さんの役に立つために足腰を鍛えて富士山に登りました。

でも少し疑問がありました。それは、死ぬかもしれない仕事をどうして自分から始めたのだろうかということです。冬の富士山で2人は一生懸命になって観測を続けていたのに救援隊が到着したときに危険な状態だったのはかわいそうだなと思いました。こんな危険な状態なのに観測を続けたいというのは、正直にいつ何を考えているのだろうかと思いました。でもさっきの疑問が少し分かってきました。それは、死ぬかもしれないけど、今やらなかったら水の泡だと思ったのではないのかなと思いました。けどその思いも残念だけど下山しました。下山がしたくても下山が危ないので救援隊も命がけというのはとても恐ろしいなと思いました。

無事に下山すると、気象学の勉強をして一生を天気観測にかける想いはすばらしいなと思いました。

大正12年に千代子さんの家族全員が病気にかかったのに、みずからの病気をおして家族全員の看病に当り千代子さんは亡くなりました。この家族はとても幸せだったのではないかなと思いました。到さんも1人では記録をとれなかっただろうと思いました。

この2人はどんなときでも皆のことを考え、常に一生懸命に生きていますが、僕はその時の気持で生き方が変わるなと思いました。これからは、常に一生懸命に、自分だけでなく人のことも考えられる自分でありたいです。

今、私達の周りでは情報化も進み、天気予報・台風予報などの気象情報は、テレビやパソコン、又はケイタイなどで簡単に分かる時代になりました。それは、苦労して頑張っていて、陰で支えてくれている人がいるからです。けれど昔は、正確な気象観測は発展途上にあり、中でも日本は世界からおくれをとっていました。

こんな厳しい時代、野中夫妻は、不可能といわれる気象観測を自分の決心でしたので、すごいなあと思いました。私だったら、こんなことはしなかつたらうし、早く天気を知りたくても、冬の富士山に登ることも絶対無理と決めつけてしまうと思います。

到の両親あての手紙の中で、「…観測所からながめる山下は、真っ黒な墨を流した、恐ろしいほどの暗黒地獄を見るような気持がする。」と書いてあり、到もこの観測は、命がけだったんじゃないかかと思ひます。けれど千代子も立派だったと思ひます。「誰でもいい、誰かのこころざしに触れて、その信頼する人の後を追いたいと思ひう。」と到を思ひう気持が千代子の立派なこころざしだと思ひました。又、この言葉はすごく心に残りました。

今の私はどんな職業につきたいか、どんな人やどんな職業についたらお母さんが喜ぶかなあとかよく考へていましたが、「心から尊敬できる人」と同じことをしたいとか、「心から尊敬できる人」の手助けをしたいとか、そんな風に人は職業を決めたり、仕事にめぐりあつたロータリークラブしていくものかなあとはつとしました。これから、色んな出会いがあるかもしれません、それを見逃さないで、心で受けとめられるように、それがどんな職業や仕事であつても取り組めるように体を丈夫に心をやわらかく、頭も少々きたえておきたいと思ひました。あと、どんなに寒くて死にそんな状態でも、日本の気象観測にこんなに尽くす人がいるなんて、思ひもしなかつたし、考へもしませんでした。

もし、野中夫妻がいなかつたらどうなつていたでしょう。多分今年のような台風が多い時は、台風が来るかどうかも分からなかつたでしょう。私達はそれを可能にしてくれた野中夫妻に感謝し、又、陰で支えてくれている周りの人にも感謝します。

そして、私はこれからこの2人を見習ひ、将来、人の役に立てる人になれるように頑張ります。

## 2人のこころざし

### 小学校6年生

私は、何よりも、周りからの冷たい女性差別の目を払いのけて夫、到さんを追い、厳冬の富士山に登った千代子さんの決意の固さにおどろきました。

富士山の山頂で、重態におちいっても、日本の為に必死で観測を続ける2人は、不安でいっぱいだったはずですが、しかし、そのつらさをのりこえることができたのは、千代子さんがいたからこそ、達成できたのではないのでしょうか。

どんなに到さんががんばっても、1人の力は限られています。千代子さんは、自分が助けえ、成功させてもらわなくてはという、使命感をいだいていた事でしょう。

ところが、2人はあいついで病気にかかってしまいます。この2人が無事に下山できたのも、2人の思いの強さに感動し、心を動かされた人達の努力があったからこそです。

大勢の人に見守られ、偉業を成功させた野中夫妻は、小説の形でとりあげられたそうですが、到さんは不満気だったそうです。まるで、自分だけが成功し、千代子さんはつきそいのように書かれていたからです。千代子さんにはげまされ、助けられて成功した男女共同の壮挙だと言うことに目を向けなければいけないと思います。

到さんと千代子さんは、2人で1つの大事業を成功させました。そこには、強い使命感と、固い決意、そして温かい援護があったからではないのでしょうか。

自分のことしか考える事の出来なくなっている今だからこそ、男の人も女の人も協力し合い、お互いに助け合いながら、野中夫妻のように、パブリックな課題に力を尽くしてきた人達の事を忘れず、又、相手を信頼する心を大切にしなければいけません。

たった1人では、何もできなくても、2人、3人、4人……と増えていくと、素晴らしい事ができます。その事を、野中夫妻のお墓のかたわらに建つ、山頂で寄り添う2人のレリーフの中から感じる事ができると思います。

私は、東京に行ける事があれば、護国寺神社に行ってみようかと思っています。まだ行った事はないけれど、きっと何か感じる事ができる気がします。

2人の立派な「こころざし」を見習って、人と人とのふれ合いを大事にしようと思います。そして、最期の時まで、家族の事を思う千代子さんの気持を受けつぎたいです。

私は毎朝今日のお天気と最高気温が気になります。かさはいるかな、寒くならないかななど、朝の天気予報を必ず見て確かめます。

このような事が、今では当たり前になっています。しかし明治時代の初めごろは、天気予報の分野でおくれていた日本だけでなく、世界の先進国でも無理だったようです。そんな中、世界に先がけて正確な天気予報や台風予報を可能にする富士山での気象観測に挑戦した、野中到さんと妻千代子さんの行動は大変なことだったと思います。

その当時は、今と違い冬山登山用の道具もなく、支援すべき明治政府にも余裕がなく、若い2人の奉仕に支えられた一大事業でした。富士山頂は、寒風が吹き荒れて、不気味な暗闇の中、2時間ごとに気温、風速など測定するのはどれほど辛いことだったのでしょうか。到が最初は千代子に絶対に山に来ないように言った気持は分かるような気がします。

千代子に辛い思いをさせてまで、手伝いをさせたくないと思っていたのでしょうか。でも千代子が突然富士山に現われた時は、千代子の強い決心を感じて下山させられなかったばかりでなく、一人でがんばっていた到はさみしい思いをしていたでしょうから、千代子にあえてうれしかったと思います。

冬山の気象観測で当凍傷や高山病にかかり重態になってまでけん命に観測を続けていた2人は、気象観測の発展にあきらめきれない思いがあったのでしょうか。そしてそこまで観測を続けられた一番大きな理由はおたがいはげまし合いながらやっていたからだと思います。一人では成しとげられない事も、2人で力を合わせればきっとできるからです。

下山した後に、到がほう章を受ける話があった時、富士山の仕事は自分一人ではなく千代子と2人でやったものだから受賞をことわったことにも、到の千代子に対する感謝の気持があらわれています。

今では富士登山の気象観測所はなくなったようで雪が降ってもいつごろから降り始めたのかわからないことがあるそうです。しかし観測所がなくなっても昔と比べると、はるかに正確な気象予報ができるようになっていきます。それも野中夫妻の努力があったからにちがいません。

私は、まだ天気予報が難しかった時代に自分でほとんど道具をそろえ厳冬期の富士山頂で気象観測をした野中夫妻はすごいと思いました。

## 「野中夫妻の偉業」を読んで

小学校6年生

台風が進路が予想できたり、1週間の天気分かたり。もう今では当たり前の事になっています。しかしそれは、明治時代に命をかけて富士山頂で気象観測を続けた、福岡出身の偉大な先駆者がいたおかげだったのです。

マイナス30度の嵐の中でも観測を続けた野中到は、本当に意志の強い人だったと思います。そして何より、千代子さんの夫を支えたいという思いの強さには、心を打たれました。彼女が富士登山をしている間、きっと頭の中は夫を思う気持以外、何もなかったのだと思います。私だったら、足手まといになるかもしれない、自分が凍傷になるかもしれない、と消極的な事を考えていたでしょう。でも、千代子の行動を見ていると、私の考えは、迷いをごまかす言い訳のように思えてきて、はずかしくなりました。

それから、夫妻に共通する、誰かがやらなければならないのなら私がやる、という心構えがみえた時、私に欠けているのはこれだと感じました。誰もやっていない事に挑戦すると言うのは、本当に勇気のいる事です。それを2人3脚でやった野中夫妻を心から尊敬します。

遺伝学者メンデルは、えんどう豆をくる日もくる日も数え続けたといひます。それが今の遺伝子治療に脈々とつながっています。メンデルはそれを想像しながら豆を数えていたでしょうか。答はノーだと思います。

到と千代子が2時間おきに、気温、風速などを記録していたのも、ただただ次のデータが知りたい、という気持から黙々と記録していたような気がするのです。そしてそのおかげで、今、週間天気を知る事ができ、台風の被害も最小限に食い止める事ができているのです。

1人の人間が、知りたい、確かめたい、という欲求を満たす事によって、将来、世界中の人の役に立つ結果を生み出す事につながる事があるのだという事を知りました。どんな偉大な業績も、最初の一步は、誰かの地道な作業によって始まるのだ、と思います。

2人が観測を始めた場所は、後に国が観測所を作りました。そして最近、それも役目を終えることになったと聞きました。少し悲しい気がします、2人の偉大な足跡は、私達でしっかり語り継いでいく事はできるのです。

気象の変化は激しいけれど、美しい四季がめぐる日本。野中夫妻の純粋なこころざしを忘れずに、四季を楽しみ、私も日々努力を続けて行こうと思いました。

## 「分け隔てなく」

小学校6年生

「傷ついた人々を分け隔てなく治療する。」これは国際赤十字社の精神であり、高松凌雲のモットーだ。高松凌雲のいた時代は江戸時代の幕末、医学を志していた凌雲にとって、当時のヨーロッパの医学の技術は、目を見張るものだったに違いない。今でこそ進歩している日本の医学も、ヨーロッパの医学と比較すると当時は非常に未熟だったものだったはずだ。そのようなヨーロッパへの留学こそが凌雲の人生を変えたといっても言い過ぎではないと思う。

フランスへ留学させてくれた将軍派への恩を感じて旧幕府軍に味方し、その中でもフランスの首都パリの病院で学んだ「貧しい人々に奉仕する病院の精神と在り方」が生かされているように思う。もし他の人だったら……。いくらヨーロッパに留学したとはいえ、敵の看病までするだろうか。自分だったらどうするだろうか。もちろん助けるに決まっていると思う反面、絶対に助けるはずがない、敵なのだからとも思い、様々なことが頭の中をかけ巡り、結局は助けないに決まっているという考えに達した。

そんなことを考えているうちに、ふと思いついたのがあの有名な看護婦、ナイチンゲールだ、敵を助けるような人は、やはりナイチンゲール位しかいないのではないだろうかと思う。ナイチンゲールは、私の中ではマザー・テレサに匹敵するくらい尊敬できる人物だ。そうだ、よく考えると、マザー・テレサも敵を助けるような人の仲間なのではないか。そう思うと、ふいに高松凌雲という人物がとてもすごい人物にみえてきた。

名前はこの伝記を読むまでは全く知らなかったし、ましてどんなことをした人かなんて知っているはずがない。でもそんな人がすごく偉大なことを実行している・・と知り、驚異の念に立ちつくした。これは何度も繰り返し呼んでのことだけれど、表に立たなくても、偉大な人はたくさんいるのだ、ということ少し考え、どうしたらこんな人になれるのかな、と思った。

私はまだ、どうしたらこのような人達の仲間入りができるかはわからない。しかし、人に分け隔てなく接することの難しさ、大切さを実感しただけ読んだかいたがあったと思う。人間にとって最も大切で、最も難しいことが「分け隔てなく人に接する」ということだ、ということがわかれば……。

## 「ポーランド孤児を救った日本人たち」

### 小學校生

私はこの話を読んで、ポーランドの人々のやさしさ、日本の人々のやさしさを感じることができました。

ポーランドという国はロシア、オーストラリア、プロセインに分割され国土のすべてが消滅した。そうして大きな国から支配されていた国です。そして日露戦争が起こり、ロシアの兵といっしょに戦場へ行きました。ポーランドの人はロシアなどの国から支配されて自由がなくかわいそうだと思った。やりたくなくても無理矢理させられていて、その国に不利になる事をすれば、家族みんな流刑させられて、人々はつらくらしをしていたんだと思いました。でも心が傷ついた分、もとのポーランドにもどして自由になりたい、そういう気持ちも人々にはあったと思う。

そして第一次世界大戦の終結時にポーランド共和国として独立をはたした。しかしロシア革命が起こり、ポーランド人はシベリアに難民として追われた。その中で親をなくした孤児が出現した。そして日本に保護をたのみ七百六十五名の孤児をシベリアから日本は保護した。命をかけて看病をした人、援助金、衣類などを届けた人もいた。こうやって日本は一つになって孤児たちをあたたかく保護したのです。

親がいなくなって絶望的だったけど保護されて、まるで天国にいるよう、天使に会っているように感じていたと思う。そして、医師や看護婦が自分の親のように思えたと思う。

戦争などで何も関係のない国民の自由、ましてや大事な家族までうばってしまう。それはすごいひどい事で、悲しい事だと思う。

そうして日本は一人も孤児を死なせず、国へ帰した。そして日本は何度か戦争をし、孤児を保護して七十五年後、阪神淡路大震災が起こった。この時、ポーランドはたち早く救護活動に入り、被災者たちを約一ヶ月間、ワルシャワに招いてくれた。七十五年前のことが恩となってかえってきたのだ。そして天皇皇后両陛下がヨーロッパを訪問した際、ポーランド国民のたいへんな歓迎の中、両陛下に会いたいという三人のお年寄りがいた。この方は日本が当時救った孤児だった。皇后の手をにぎってはなさなかったという。

日本がやったことは本当によかったことだと感じた。親をなくした悲しい気持ちといっしょに、助けてくれたうれしさなども心の中でいっぱいまっていると思う。そしていつまでも忘れられない出来事になっていてすごいと思った。けれど、日本が保護したことで命の大切さを知ったはずなのに、その後何度か戦争をしてしまったのかわからない。

国と国が協力して大きな絆が生まれた。だから私は協力のすごさを知れたし、命の大切さはもちろん、人と人とは必ずどこかでつながっていて、支えあいながら生きていることを学びました。